



泚諧穉憲維然  
興磨沼生之產業  
不夷序相始  
紫擊之妙子能  
相人相書

拈花微笑頷蓋目擊  
先聖靈機言論不及  
白其不及以一言半  
句通線路使人入玄門  
名之曰下語也唯有言外

知歸者投機也話言帶  
句是知識耶幻住菴主  
聞蛙投井忘却身ハコ  
一句以蓋天下若思有ラハ  
邪安蓋了了字哉

不依<sup>レ</sup>夜<sup>レ</sup>來<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>爭<sup>カ</sup>識<sup>ハ</sup>海<sup>ハ</sup>  
 秋<sup>キ</sup>矣<sup>キ</sup>蕉<sup>ノ</sup>門<sup>ニ</sup>三<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>性<sup>子</sup>學<sup>ヲ</sup>步<sup>ヲ</sup>  
 於<sup>レ</sup>大<sup>ノ</sup>道<sup>ニ</sup>作<sup>レ</sup>為<sup>ス</sup>此<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>卷<sup>ヲ</sup>因<sup>テ</sup>  
 書<sup>ハ</sup>是<sup>レ</sup>言<sup>ヲ</sup>平<sup>ク</sup>卷<sup>ノ</sup>首<sup>ニ</sup>  
 享<sup>レ</sup>和<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>集<sup>ス</sup> 斯<sup>ノ</sup>夢<sup>ヲ</sup>

黃華菴輯  
 夜人撰

關



右銅印

卯<sup>ノ</sup>如<sup>ク</sup>花<sup>ノ</sup>乃<sup>レ</sup>經<sup>ル</sup>有<sup>レ</sup>竹<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>可<sup>ク</sup>言<sup>ハ</sup>の<sup>ノ</sup>門<sup>ニ</sup>  
 去<sup>レ</sup>來  
 升<sup>六</sup>



不許葦酒入山門

何事かきしえきしうねきい

友国

きるよなきしねよ入るんれ

松菊

いつねぬしゆなきさなるよま

復江

ひものふらふしきし一宮の門

許笛

浦の月ほよきし入るよき石

仙真

夕の月や後も思てかぬ二月

井眉

風吹してたきしきりぬきしの月

生白

妻嫁となりてけしきしはわきま

後定

その中やふちの室はまの秋

東居

しるしきしを木のけしきし

魚人

あしなるものうたかた五口に

一峯

ふこのおきよゆきやまら嵐

湖卜

葉あらしきし

吾雀

その戸の鎖ある日成花如雲

一草

共庫

花をやはらかにほろほろと水の音を  
梅の蕊をちりちりほろほろと  
ゆふのにおろろと雪のちりちり  
雪の月のねほろほろと

豊浦トヨウ 芦アヲ 涯ツ  
舎六 定雅

古今不鎖



春のねほろほろと月のねほろほろと

八千里ヤチ

春のねほろほろと月のねほろほろと  
梅の蕊をちりちりほろほろと  
ゆふのにおろろと雪のちりちり  
雪の月のねほろほろと

巴龍 吾周 普宥 李郷 友郷 鯉郷 歌三 楚山

山の秋暮れるあもせうと東  
 けらよ小家つらむと秋の中  
 新戸生や月系本自らまの  
 こは月のそよはるさやまの  
 卯の系平はまのこころ

菅 笛  
 江 松  
 星 流  
 露 井  
 亀 遊

看脚下



ち~~~~なれた林の明やうや栗の不  
 松とてえ脈つくく月おは  
 おあささつ其のハ~~~~月おは  
 ういあをれもな定のみれか  
 籠持~~~~出あ~~~~古の字は  
 見る~~~~地を懸~~~~扱い  
 寒拵下あめい生は時  
 大なるあ~~~~さ~~~~あ~~~~

高野 十 川  
 伊 女 吞 石  
 ア 富 山  
 ミ 櫻 丸  
 ア 可 友  
 長 石 鏡  
 羅 風

月出雲のいづれも霞のいづれ  
 大蔵のいづれも雲のいづれ  
 遠くは日や暮るるのいづれ  
 麦刈のいづれもまてある 柳田子  
 山菜系のお筆の下よりの道  
 よい春と云く人とも動さぬ  
 門のいづれもたぐり梅の花  
 立出て又まは夜ほき梅の  
 月化  
 質明  
 南義  
 五嶺  
 松邦  
 切瑗  
 明  
 完来

廿  
 雄  
 撰



獅子吼

梅の木の花よかまもぬすむい  
 翁

明皎く白的く  
 作麼生  
 秋の言中よねをけりしあやも  
 升六



木犀のつらゆらゆら  
いーらひ啼ハ山のか  
土登よきけまおのた  
田のまきまきぬふら  
まきまきぬふら  
たのまきまきぬふら  
麻の子乃ねまふ  
結ぬまきまきぬ

井眉  
夜人

六眉人  
六眉人  
六眉人  
六眉人

神まきのあか  
ものまきまきぬ  
新島のまきまきぬ  
いー押まおの  
小屋ねまきまきぬ  
すまきまきまきぬ  
うまきまきまきぬ  
まのまきまきまきぬ

六眉人  
六眉人  
六眉人  
六眉人

わがこころの静けさよ

金洲

あつちの空をよめ

子来

わがこころの静けさよ

升六

春よよめよ

洲

待よいのほのせわし

来

あつちの空をよめ

六

あつちの空をよめ

洲

こころの静けさよ

来

あつちの空をよめ

六

豆腐つくり

洲

あつちの空をよめ

来

遊びはよこ

、

あつちの空をよめ

六

あつちの空をよめ

洲

あつちの空をよめ

来

多しとぬむし一乃月を深き  
 出かたりのきし業拵に引合し  
 くのまゝのまゝのふのぼりて  
 六  
 一  
 河



諦觀法王法  
 法王法如是

わる家之月の西きり鳴る  
 釣瓶又けしはき田一投  
 魚のしと柳はいつせる原き  
 袴をはきぬまはしつらよ  
 ちんちんようした籍うく  
 枕きくし柱きりか  
 芳とまねようしたふよ  
 ちんちんよのほりし  
 時来  
 桃士  
 升六  
 来  
 士  
 六  
 来  
 士

六 東  
六 東  
六 東  
六 東  
六 東  
六 東  
六 東  
六 東  
六 東  
六 東

六 士  
六 士  
六 士  
六 士  
六 士  
六 士  
六 士  
六 士  
六 士  
六 士

六 南  
六 南  
六 南  
六 南  
六 南  
六 南  
六 南  
六 南  
六 南  
六 南

人得。西ハす〜〜〜  
海老のよ〜〜〜  
いつもある君の口〜〜〜  
うせけす〜〜〜  
およ〜〜〜  
志加のむ〜〜〜  
人の脊よ〜〜〜  
あ〜〜〜

甫六甫六甫六甫六甫

細〜〜〜  
あ〜〜〜  
〜〜〜  
〜〜〜  
〜〜〜  
〜〜〜  
〜〜〜

甫六甫六甫六甫六甫



娟醜分明

右七顆

化童篆例

三日有のかりきおるわつふは

松菊

山は志つゝ乃路ぬきつゝま

升六

竹を羅敷そつゝひよ肩

奇洞

ふよむ人の夢くせあふ

菊

ちんちんをさしむたむけむら

蓬宇

之積鉄をつゝむあれとつゝ

洞

双六の掛そわつゝ明乃籠

菊

扇ちすけしきろあひや

宇

急こつと踊く又石つゝ

外海

好ふよあふまをまお月

菊

あひのちんちんをたおすのちんちん

洞

海歌唄ふるほろを井

海

あつゝと撰をよむつゝあ

宇

雨のふりやうく乃さき水お

洞

吾は色を愛ふはけしき人又是人  
内は好むと御覧あらば  
けつるよとせむらうらみ  
提灯消せぬ娘よの思ひ

菊 宇 海 菊

此の若草はわくの思ひ  
とて果前なりまむら

サ雄  
升六

藤毛何毛尾の思ひ  
その靴をききぬあはれ  
かま寸こむ口の思ひ  
おの娘乃と童よと  
おまよふにうらむら  
眼の傍珠よむら  
かき焼せあはれ  
ほの思ひ

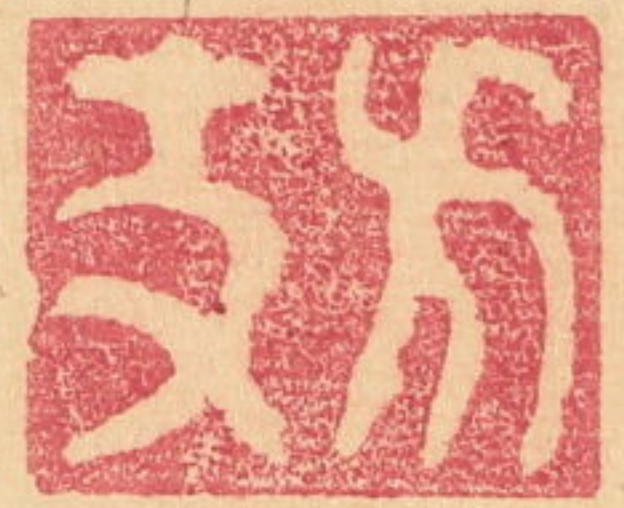
梅 後  
雄 六  
後 六  
雄 六  
後 六  
男

佛車代古よきつゝみそを  
 先女もつゝもむしあはれ  
 うらゝおぼれちのるむお  
 給出せとて西ヤのらあ  
 之階は孫のさきさき  
 籍のつらもまはらう  
 阿多はの鼻うらする  
 ぬらぬら乃あはれよ

六 後 男 六 後 男 六 後

金  
 洲  
 撰

方丈



井ノ口 町 一 軒 あり  
 いろくろくろく せん せん 松の心

二 由 柳





きつろくさうしめきつろく月歌  
友とさうしめさうしめ  
さうしめさうしめ

賒レ暖ヲ幾一緡ノ錢

右詩歌俳之三子夜話

漫  
洞  
馬



主人公

右二題化意門江津纂刊

いそよみさハを後を本様  
はも守也さおのふい  
お梅の美さうさる自ね外  
飛ぶ城まおらさうしめ  
さうしめハ救うさうしめ  
さうしめハやいさおのさうしめ  
三月月の新もたさうしめ  
口切平宇治の夕らさうしめ

駝岳  
甫六  
廿雄  
洞冠  
自樂  
廿三  
長齋  
籬蜂

春耕  
 龍子  
 外海  
 川女  
 永六  
 蜂爰  
 鶴雄  
 銀獅  
 松のね 残子よつし 余ま

春耕  
 龍子  
 外海  
 川女  
 永六  
 蜂爰  
 鶴雄  
 銀獅



明歴の露堂

牡丹咲て日はあやめし  
 妻のきき 女よハゆ  
 花のさき 花よハゆ  
 花のさき 花よハゆ  
 花のさき 花よハゆ  
 花のさき 花よハゆ

梔士  
 鶴爰  
 花簾  
 咫尺  
 風箏

菊の香もほろほろとおよぶ水  
 下さるや秋の風ふくまへし  
 秋ありて秋の水も清く  
 山つきの秋風ふくまへし  
 吹よる木の葉もさへて

月白風清



右二顆化童門幸哉篆刻

蓬<sup>左海</sup>守  
 逸<sup>持ッ</sup>枝  
 一<sup>兵庫</sup>郷  
 吳<sup>兵庫</sup>来  
 玄黄

美代のほろほろか先世の  
 ハ秋やカミナリすまへし  
 志<sup>ハ</sup>あつとくまへし  
 梨の香おのつとくまへし  
 其の心つとくまへし  
 長<sup>ハ</sup>空もあはれ  
 啼<sup>ハ</sup>鹿の願もあはれ  
 よさるや十<sup>ハ</sup>秋の月もあはれ

洛<sup>ハ</sup>瓦全  
 甫尺  
 其<sup>イカ</sup>成  
 若<sup>イカ</sup>翁  
 老<sup>ハ</sup>琴  
 一<sup>ハ</sup>笑  
 千<sup>ハ</sup>枝  
 魏<sup>タレゴ</sup>道

海きくもあふらち中とまぬ  
 あくましくもあふらち中とまぬ  
 ちかや 柿赤くもあふら  
 ちか友のうらみ入るる 肥  
 けはるるもあふらち中とまぬ  
 一八やあふらち中とまぬ  
 美くもあふらち中とまぬ  
 ちかやあふらち中とまぬ

其<sup>タシ</sup>萌  
 有<sup>フコ</sup>篁  
 葵亭  
 青<sup>アキ</sup>峯  
 蓬<sup>アキ</sup>壺  
 可<sup>日向</sup>笛  
 玻<sup>ト</sup>井  
 岸<sup>ト</sup>芷

松 菊 撰

選佛場



幅を出さず又俣あつた  
 加茂川の志さうな流を  
 降さず降あつた

丈草  
 大江丸  
 瑞馬

ふれしむすむ中のたむら  
わきれまゆかきねむを  
秋のるまよもよふは  
ちりぬまの踏むは  
一まの無まのこ  
花あう月かふま  
稲妻乃きりま  
水たしこ一日

布石  
雪涛  
夜人  
氷儿  
魯隱  
采彦  
杉光  
月人

る時をぬを  
ふれしむすむ  
まの無まのこ  
花あう月かふ  
稲妻乃きり  
水たしこ一日  
は  
ねのま  
杜のぬま  
祿ま

相夫  
魚真  
呉辰  
一鸞  
東芽  
鶴哉  
半輪  
小雄彦

其雨やねいさるるうへよ  
是ほものちなるしんま  
とくすましんも柳のみをく  
梅後 泊帆 斯萼

止静

右二顆 今江篆判



宇治らにまのゆくとまはらう  
まつのやまの人よほらうまのま  
口やしのふらふらなまらま  
不存 我笑 金洲

見らるるもまのゆくとまはらう  
るらるるまのゆくとまはらう  
まのゆくとまのゆくとまはらう  
あらまのゆくとまのゆくとまはらう  
忘らるるもまのゆくとまはらう  
丹波路のおよまのゆくとまはらう  
稲妻や西浦まのゆくとまはらう  
みまのゆくとまのゆくとまはらう  
小田輝 翁雄 馬羊 竹亭 洞霞 右秀 未犯 桂郎

とうけの鶴の舞のちの月  
 秋唐よまゝのまゝの月  
 師のお茶のまゝの月  
 まゝのまゝのまゝの月  
 師のまゝのまゝのまゝの月  
 まゝのまゝのまゝのまゝの月

尹 蝶更  
 仙 李

八仙

馬 蓼

玉 藻

百 貫

井 花

故 参



眼をまじはの飛ぶまゝの月  
 たらぬぬのまゝの月  
 たらぬぬのまゝの月  
 たらぬぬのまゝの月  
 たらぬぬのまゝの月  
 たらぬぬのまゝの月  
 たらぬぬのまゝの月  
 たらぬぬのまゝの月  
 たらぬぬのまゝの月  
 たらぬぬのまゝの月

イカ 蟠 松

少 小 光

女 風 子

倉 経

和 秀

高野 終 南

一ツ三 斤 月

サカヒ 一 簀



うね花子うらまやまきいぬか  
笑あゝねよう月ありせねふ

荒陵

木子 虹

アフミ

騏道

是日已過  
命亦隨減  
如少水魚  
斯有何樂



さるのまきいぬね日と日わく  
十ふ又あおくせねの志ろきけ

エツ

子 丑

乙 峯

けうきいぬねいぬ  
梅の月まうけと敷いん寺  
ねの味一日つるけりふ  
ふねいぬひと敷ふ葉むと  
静まふたうまねの日記  
うらまの揮お中よわね  
ねたまふ耕まふ人よま  
こつるハ飼まふものよま

ハレ

明

栗堂

遠江

可月

仁里

太室

イヨ

卷玉

丹七

サツニ

關 叟

桃士撰

浴室

右三顆

萬兵篆刻



居風呂と楳の何やねはる月

蕪村

おきつゝ若あゝいかにむきと越

峰又

み穴の空々々やのこ敷おひ

時来

月とまゝ水ようつゝや露のま

枕源

蚤ゆふね半の汐乃いりりい

宜白

冬川や杭まきまき水のみ

吾萍

夕月やいつらあけも木のま

泉車

手倦きまきらと小の敷き

松雨

香吹のかくまき葉しりまの元

戦兢

送りや十念あゝはの夕々

春紫

鳴きけ中又居しむゆき

石分

正月おとろの涙たあゝぬ

魚眼

日月田やもつちあふきりく福  
 ゆく水う二月きろ乃き外  
 けきりきりぬく其の空  
 かろろの人のさりわもせろり  
 芦よ厚うききき成強く  
 字舟  
 桃香  
 青鯉  
 尺艾  
 月居

洗到無塵垢轉多



右 關之養篆判

志はねの田抄の啼く志は  
 志はねの甲月まきく相ひ  
 友の事て万山月まねい  
 うせきまかやうけりま事知  
 わつしとまきね日月山  
 花大根おのりまろき成取寸  
 起るおれしく門の柳を  
 さらけよ鳴ぬ子まの礼多  
 子来  
 桃醉  
 鳥穿  
 一亭  
 亀連  
 鯉水  
 鯉卜  
 八百種

みうさかたのちよはるく清をい  
 鉢きりて汝ひとりあつき  
 至生念佛花よいのち取敷  
 草石糸きりてあつてあつて  
 糸糸の粒きりてあつてあつて  
 山深く志をあつて入りぬ夕  
 かへりてあつてあつてあつて  
 花と水あつてあつてあつて

枕栗 <sup>イカ</sup>  
 蕉里  
 祐昌 <sup>アツミ</sup>  
 五来  
 丈九 <sup>洛</sup>  
 紫暁  
 玉洋  
 蒼虬



清浄  
 右 今江纂刊

花をいりてあつてあつてあつて  
 花の影いりてあつてあつてあつて  
 一切やあつてあつてあつて  
 菴の影いりてあつてあつてあつて  
 花の影いりてあつてあつてあつて  
 花の影いりてあつてあつてあつて

羅城 <sup>ヲハリ</sup>  
 竹首  
 路人 <sup>シナリ</sup>  
 伯先  
 蕉雨  
 鹿古 <sup>カ</sup>

ちりぬ其日〜乃る、此外  
 箏や塀〜まゐるもねの家  
 心を持て吹す〜なる木葉  
 白牡丹見る肥志〜なる  
 物ゆのすゝりけし〜木葉外  
 屋ま〜と明〜る家のぬ  
 タ〜とヤ〜る〜るの味子も  
 桐の突乃美〜る〜る〜る

春<sup>エト</sup>蟻  
 午心  
 巢<sup>イセ</sup>北  
 秋<sup>イセ</sup>屋  
 武<sup>クニハ</sup>陵  
 桃<sup>サスキ</sup>葉  
 萬<sup>ナカト</sup>井  
 橘<sup>日向</sup>綯

時来撰

目過寮

右 關之養篆刻



あり見よ門掃くまのを今外  
 え日とあやなきもの頼ひ掛  
 梅の月たきつて居てもよき世

廿<sup>エト</sup>角  
 成<sup>エト</sup>美  
 長翠

ゆく厚くかきし初る家系  
秋の吹やひらき木立して松の風  
ちき程又おのほむをね乃ほ  
御口よりえさう寸秋のま  
船をやら只々鳴しかまら  
えりの際をさわく草をい  
ゆきしんはいつちまをう船をい

三千彦  
恭昌  
一茶  
祇徳  
葛三  
恒九  
嵐外  
可都里



一宿帰

右

今江篆判

我としも春をさく秋をい  
いろくかきし飛さう厚のま  
うらうやや春まぬ花乃旅  
うすやうよあをせうや花  
うらうの枝よあてる船の  
まのね乃おるうらう山

士朗  
少汝  
松兄  
卧央  
岳輅  
卓池

素<sup>シテ</sup>磔<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>く<sup>シテ</sup>ま<sup>シテ</sup>く<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>月<sup>シテ</sup>  
 秋<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>夜<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>月<sup>シテ</sup>を<sup>シテ</sup>見<sup>シテ</sup>  
 いら<sup>シテ</sup>ぬ<sup>シテ</sup>衣<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>帯<sup>シテ</sup>や<sup>シテ</sup>桐<sup>シテ</sup>太<sup>シテ</sup>楠<sup>シテ</sup>  
 二<sup>シテ</sup>秋<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>戸<sup>シテ</sup>や<sup>シテ</sup>日<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>く<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>月<sup>シテ</sup>は<sup>シテ</sup>け<sup>シテ</sup>  
 苦<sup>シテ</sup>出<sup>シテ</sup>て<sup>シテ</sup>何<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>ぬ<sup>シテ</sup>衣<sup>シテ</sup>を<sup>シテ</sup>か<sup>シテ</sup>ら<sup>シテ</sup>う<sup>シテ</sup>ら<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>  
 啞<sup>シテ</sup>蟬<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>も<sup>シテ</sup>り<sup>シテ</sup>ま<sup>シテ</sup>は<sup>シテ</sup>す<sup>シテ</sup>も<sup>シテ</sup>お<sup>シテ</sup>ら<sup>シテ</sup>う<sup>シテ</sup>  
 其<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>衣<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>帯<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>く<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>月<sup>シテ</sup>は<sup>シテ</sup>け<sup>シテ</sup>  
 二<sup>シテ</sup>月<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>衣<sup>シテ</sup>を<sup>シテ</sup>か<sup>シテ</sup>ら<sup>シテ</sup>う<sup>シテ</sup>ら<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>

素<sup>シテ</sup>磔<sup>シテ</sup> 雲<sup>シテ</sup>帶<sup>シテ</sup> 柗<sup>シテ</sup>莊<sup>シテ</sup> 斗<sup>シテ</sup>入<sup>シテ</sup> 梅<sup>シテ</sup>選<sup>シテ</sup> 白<sup>シテ</sup>年<sup>シテ</sup> 暮<sup>シテ</sup>丸<sup>シテ</sup> 吳<sup>シテ</sup>山<sup>シテ</sup>

茅鞋竹杖



右 關之養篆刻

重<sup>シテ</sup>厚<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>衣<sup>シテ</sup>を<sup>シテ</sup>か<sup>シテ</sup>ら<sup>シテ</sup>う<sup>シテ</sup>ら<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>  
 花<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>衣<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>帯<sup>シテ</sup>を<sup>シテ</sup>か<sup>シテ</sup>ら<sup>シテ</sup>う<sup>シテ</sup>ら<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>  
 柳<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>衣<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>帯<sup>シテ</sup>を<sup>シテ</sup>か<sup>シテ</sup>ら<sup>シテ</sup>う<sup>シテ</sup>ら<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>  
 二<sup>シテ</sup>月<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>衣<sup>シテ</sup>を<sup>シテ</sup>か<sup>シテ</sup>ら<sup>シテ</sup>う<sup>シテ</sup>ら<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>  
 旅<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>衣<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>帯<sup>シテ</sup>を<sup>シテ</sup>か<sup>シテ</sup>ら<sup>シテ</sup>う<sup>シテ</sup>ら<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>

重<sup>シテ</sup>厚<sup>シテ</sup> 玉<sup>シテ</sup>屑<sup>シテ</sup> 樗<sup>シテ</sup>堂<sup>シテ</sup> 布<sup>シテ</sup>舟<sup>シテ</sup> 石<sup>シテ</sup>蘭<sup>シテ</sup>

えうらぶのうきまの夜の月  
さきの船乃らぬ遠居より  
月まらぬたなまのよの松  
月の出まらぬものち枯る那  
みちら我こころの既ゆい  
まこころや折すこころを  
に由月やまらぬこころの  
まらぬやまらぬこころの

翠實 タニハ  
萬和 ヤマト  
喜齋 サカヒ  
桐栖 兵庫  
雪哉 イタミ  
毛龜 イタミ  
稻丸  
瓜坊

遠きものちおれよやまらぬ  
まらぬのつみまらぬもの  
散花の月強しと見えぬ人  
雀のまらぬとまらぬもの

素艶 ツツミ  
固能 タニハ  
大燕 イナバ  
五明 テハ

故林をまらぬもの  
まらぬもの先我まらぬもの

子丑  
白年



峰さゆ水ハ函ニ鶴啼く  
 信さしきき十月廿月  
 燕ちつる人又焚火の白くむ  
 菽のほよ車うさされ  
 けりくとやのり月の清き  
 飯の志ろきまきおほし  
 うま花の涙依乃入江の味子  
 うとれ男をさうけうやそそ

丑九年 丑九年 丑九年 丑九年

暮丸

あさねの夕とまてよいひ  
 笠原千うさく藤さへ七那  
 柳系よさきて小るの路村  
 乞合中るのねを志こし  
 巾着乃葉さける小むる雨  
 とらひろさるる星さすお答  
 けり改の満よつげ町の月  
 新うほ好乃やそお友おる

九年 丑九年 丑九年 丑九年

大塊假我以俳諧

右

今江篆刺



集さめぬる日を解交乃

秋のきりぎりすを六士一建よ

今一して重谷の遊ひを

うらす

と秋ハうらうらうするお月よ

升六

星のゆるるまお戸

サ雄

細はこのほろろ命よおのり

松菊

のちのやうせうまさら山鳥ら

梶士

本よりお中よあの子の花をう

金洒

槍を削る孫よゆふ月

夜人

二三十祝ひ日ほりき秋の光

時来

をとうの起向皆をんまへ

執筆



夫臨古帖。如遇異人。不  
 必相其耳目。足頭面。  
 當觀其與中心笑語精  
 神。流雨露。安臨古印。六  
 然。只可取其神韻。于  
 非烟非雨。務之間耳。是

草堂の古の帖の水乃きり  
 三日月は角ふりうは極年  
 明やすきねを誇くもる川  
 三日月を遠入りの故郷  
 五月のやまの山はねの巻  
 松風は村に出るはるる

夜人  
 廿雄  
 金洲  
 松菊  
 桃士  
 時来

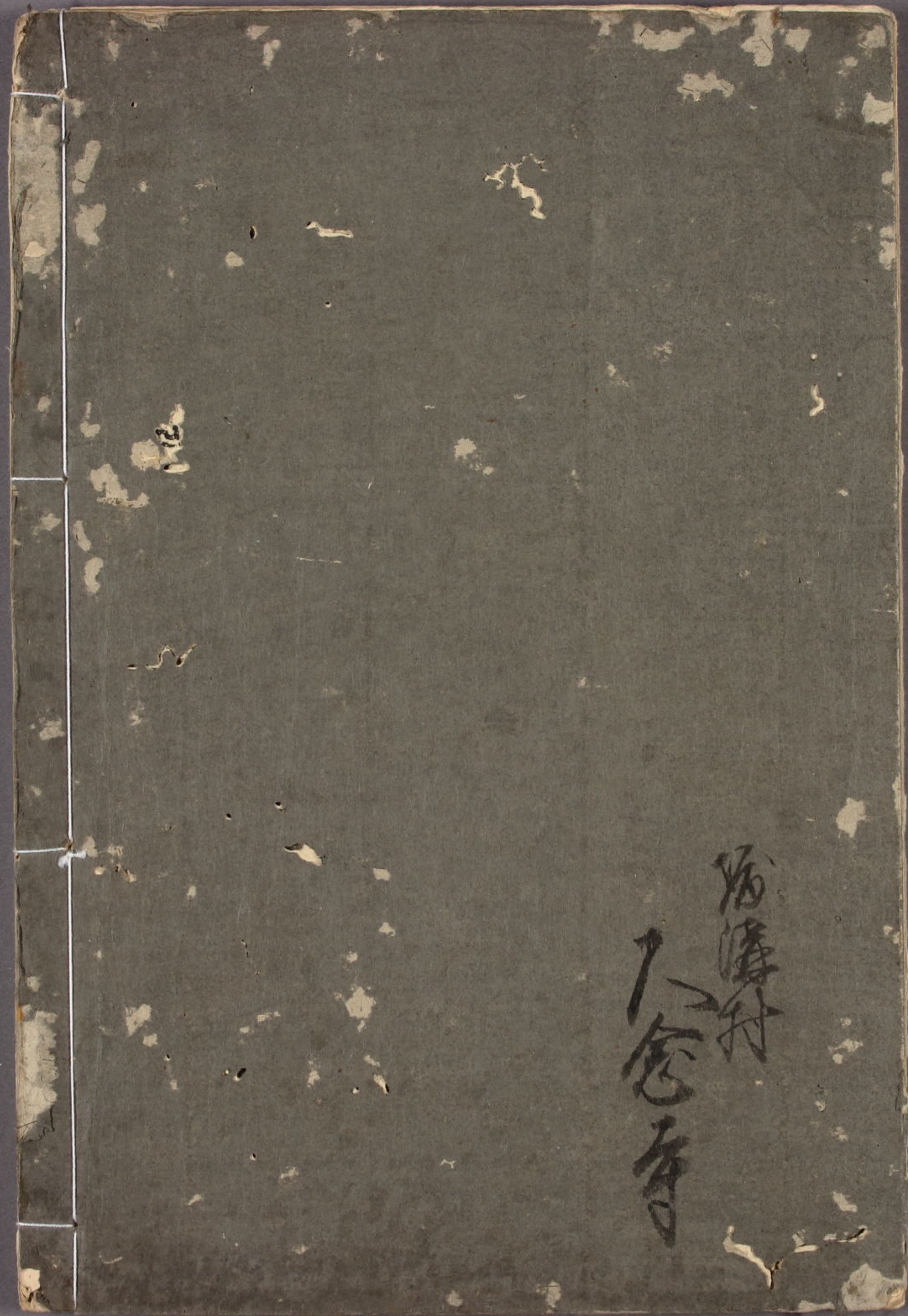
刻印之語。而雖禪機  
非滑尔無他焉。要只  
可取其頓悟。雅致于  
冰煙。冰雨霧之間耳。  
享和成之夏。生生瑞馬



蕉門俳諧書林

京三条通寺町西口八

菊舎太兵衛



海鏡村  
八念寺